

# 山田文昭と伊藤証信の真宗史をめぐる衝突点

—伊藤証信への書簡を中心に—

中 川 剛

はじめに

山田文昭は真宗の基礎的な資料を収集・編纂した、真宗史研究の嚆矢である。山田文昭の名前はよく知られていたが、山田文昭自身の研究はあまりされてなかったように思われる。

最近になって、近代仏教研究家の柏木隆法氏が所蔵している伊藤証信関係の資料から山田文昭の書簡が発見された。時期は明治三八年から四十二年までのものである。このことよって、不明とされてきた青年期の動向などが少なからず明らかになると考えられる。伊藤証信は「無我愛」運動の創唱者でその精神運動は各界に影響を与えつづけた。文昭と証信は真宗大学からの同級生であり、研究院の時に大学の寮を出て共同生活をしている。そのような交流から一方は新宗教へ、一方は史学を志した事実は注目すべき点であり、本稿では山田文昭の書簡を中心に、明治期の社会意識、思想のなかでどのような意味をもつか考えてみたい。

なお、本稿は山田文昭の出生より、月見覺了から真宗大学の図書係になるように打診され、その後、『本願寺誌

要』編輯委員に任命され本格的に真宗史の研究に着手するまでの明治四〇年までの動向を一章とし、二章は伊藤証信への書簡を中心にまとめた。資料編として全一七通の書簡の翻刻をした。

### 一、山田文昭と伊藤証信

山田文昭は明治一〇年二月九日、三河国碧海郡志賀須香村大字上佐々木（現・岡崎市上佐々木）の正福寺第一三世住職文成の二男として生れた。文昭の兄は早く夭折したため、文昭が早くから後継として育てられた。文昭の父文成は、大谷派の地方での門弟の教育機関の三河教校で教鞭を執る教学者であった。檀家数は百数十であったというから、生活に余裕はなくとも教育には熱心な家庭環境で育ったと伝えられている。また、佐々木（山田）月樵の生家の願力寺は本家筋にあたり、佐々木月樵とは幼少より交流があった。三河地方は学問に寛容な地域であり、高学歴な門弟を多く輩出したことも文昭に影響していると考えられる。

一三歳で得度し、地方の門弟教育機関・三河教校、三河中学寮を卒業し、真宗京都中学寮に編入する。ここで起こった清沢満之を中心とした本山改革運動に参加し退学処分になっていることも興味深い。山田文昭の性格は病弱ということもあり、内向的でおとなしい学者肌の人物として評されているが、改革運動に参加をしたり、真宗大学在学中には近藤純悟に影響を受け、女子教育などに興味をもち、『ちご櫻』（光融館）や『仏教の女子』（森江書店）など出版したり、同人誌の編輯・執筆活動を活発におこなっている。

明治三四年、真宗大学が高倉学寮との軋轢の末、東京に移転する事になり、これに伴って山田文昭も上京した。

このころの真宗大学は学監清澤滿之の自由な校風で『平民新聞』が読まれ、伊藤証信のように平民社に出入りする学生もいた。文昭は「遇ふたならば枯川（堺利彦の雅号）の新平民に對する考えをきいてくれたまへ」と伊藤証信に書簡を送っている。間接的ではあるが、社会主義に一定の理解をしていたものと思われる。

一方、伊藤証信は明治九年九月一〇日、三重県員弁郡久米村坂井に富農の長男として生れた。幼少より真宗に親しみ、一四歳で母方の菩提寺円授寺で得度。その後、美濃教校、真宗中学、真宗大学へと進んだ。同級生ではあつたが、真宗大学の頃は真宗学や仏教学を専門とする第一部と外国語や、哲学など「近世科学」を含む第二部と学部が違つたため、顔見知り程度であつた。証信との交流は真宗大学（巢鴨）研究院からである。証信は研究課題を「支那仏教教理史」、文昭が「真宗史」を課題にしており、共に史学であつたことが親交を深めた。この二人が学生寮を出て共同生活をする事となつたのは、日比谷図書館（現・国会図書館）に通うために寮の門限から解放されるためであつた。下宿先としたのは、巢鴨の地に真宗大学の土地を提供した、村長の田崎惣太郎の離れであつた。この離れは二人の雅号の古川（こせん）と夢白（むはく）（文昭）の一字ずつ取り「古白庵」と名付け、ここで生活は一年半ほど続いた。その後、明治四四年、真宗大学が京都に移転する時に、文昭残務委員となつたのも田崎家との関係からであつた。

明治三十七年七月一七日、文昭の父が急逝した為、三河に帰ることとなる。新住職としての多忙な法務によつて体調をくずし、療養もかねて真宗大学を休学してしまふ。一方証信も一ヵ月後、父危篤の知らせを聞き郷里へ帰つた。容態が安定に向かつたため退院して病床の父と休んでいる時に神がかりの状態に陥つた。直前に綱島梁川の

著書を読んでいたことが一因とされている。この感動を「無我の愛」と名付け、東京に戻り、文昭のいなくなつた古白庵で「無我の愛」の実践として近隣の子どもたちに読み書きを教えるようになった。しばらく古白庵で生活していたが、一人で住むには広く感じ、大家の田崎惣太郎に相談して夜学校を条件に近くの荒れ果てた大日堂で自給自足の生活を始めた。この生活に共鳴した、真宗大学の安藤現慶と和田幽玄が同居するようになり、浮いた生活費で機関紙『無我の愛』を発行した。

「無我」は親鸞が説いた他力の本願であり、「愛」はトルストイの唱えた人類愛である。機関紙の反響は大きく、全国から注文が殺到し、来訪者も増えていった。この状況に大学側も真宗の教えに反するとして中止命令を宣告したが、本山に僧籍を返上し、大学側に退学届を出した。証信の脱宗によつてさらに運動は発展したが、教団を否定した無我愛運動が新たな教団へと成長し始めたため、機関紙発行から八ヶ月で運動の停止を宣言することとなる。

閉苑後、証信は赤松照憧（与謝野鉄幹の実兄）が経営していた徳山女学校にまねかれて、東京から離れた。

文昭はその頃、三河近郊等を教化して廻ったり、近所の子を自坊に住ませ修養のようなことを行っている。証信が大日堂に移った時も岡崎の赤味噌を送り、活動を応援していたが、『無我の愛』発行以後、即座に批判の態度を鮮明にとつた。ちなみに、文昭が巢鴨の無我苑に行つたことは一度も無かつた。

## 二、山田文昭の書簡

山田文昭の書簡は伊藤証信が晩年を過ごした西三河の西端無我苑で通称「玉手箱」と呼ばれていた手文庫に収められていた。この文庫は証信が生涯幾度も引越しをくり返した中で常に手元に置かれていたものである。伊勢湾台風によって無我苑は半壊したため、数多くの資料が散逸したり水没した中で無事であった数少ない資料である。

注目されるのは、大日堂移転頃から、週刊『平民新聞』を雛形にした機関紙が企画されていた点である。『無我の愛』は広告のピラの形で巣鴨近隣に配布された「日曜通信」から発展したとされているが、明治三八年三月三日書簡には、「いつ、僕等は宗教的平民新聞を出すことができるであろう」と信仰の宣伝として巣鴨から発行することを期待している。文昭が平民社に興味を持つようになったのは、論客の見識の高さと、世間に受容れられないという同情からであった。

証信の主張した「無我の愛」に関して文昭は始めから、懐疑的であった。機関紙『無我の愛』が発行された時点で、その教義を理解したと考えられる。文昭の関心事はいかに布教を進めるのかという、運動論に共鳴していたことが伺える。「無我の愛」は「他の愛に任せ、而も同時に全力を奮って、他を愛する」という考え方である。文昭は、「愛他」に関して「愛」という概念が主観的な意味を含んでいるところに「無我」との矛盾が生じると主張した。第一次無我愛運動は発展する過程で、教団化へとまた後年、河上肇が「愛他」について誤った解釈をしていたと述べているように、「無我の愛」を論理的に位置づけできなかったことによる証信のいきづまりが閉苑の

理由である。文昭の指摘は的を得ていたといえよう。

証信が閉苑して徳山に行った後、書簡の往復が始まった。その内容は、「無我の愛」については全く触れられていないが、文昭が上京した経緯や住田智見や多田鼎と交流に関してである。特に、多田から綱島梁川について学び、『病間録』や『回光録』を熟読していることが興味深い。証信が「無我の愛」を体得する直前に読んでいたとされている。文昭は「無我の愛」を否定した後も、信仰という点で関心を持ち続けたのである。

### 三、むすび

伊藤証信の主體的な精神運動は文学界、社会運動家、政治家まで影響を与えた。一方、山田文昭は信仰を客観的視点から歴史を再検討する態度をとった。清沢満之の影響下で、教団の否定をした証信と、信仰から出発する伝統的な親鸞観から資料の積み上げによって宗祖の実像を解明しようとした文昭は、出発点においてほぼ同じ視点であった。現状を打破する形で二人の学究が開始されたことは注目すべき事実である。その思想の深化の過程で二人が衝突し、離れていったものと考えられる。

なお本論文は山田文昭の中間発表である。真宗大学が京都移転以降、大谷大学での宗史編修所設立や京大派の三浦周行との交流は他日に記したい。